

第一次世界大戦期の中国における列強の表象

—1914 年から 1918 年までの『東方雑誌』をめぐって

段書曉*

顧文**

Developing the Image of Enemies in Suffering:

The Representation of “Lie qiang” in *The Eastern Miscellany* during the First World War, 1914-1918

DUAN Shuxiao, GU wen

(Received October 31, 2015)

Abstract

This research will focus on the image representation of a historical concept in China, “Lie qiang”, which could be translated as “Great Powers” in English, but holds much more negative meaning and a strong relationship with wars and traumas brought by Colonialism in modern times. So in a certain sense, this concept and its subtle semantic difference with “Great Powers” is a very important perspective for us to know the Chinese’s worldview and national identity.

*Former researches on “image of foreign countries in modern China” have been too limited in some stereotypes built by formulaic and theatrical images in caricatures. And the spirit of that age embodied by the historical concept “Lie qiang” has never been noticed. Therefore, this research will focus on the illustrations in *The Eastern Miscellany* during the period of the First World War (1914-1918), and discuss how a distant war among “Lie qiang” could be represented in pictures by a magazine insisting on neutrality and objectivity, and find out another face of “Lie qiang”’s image in modern China.*

*Through the analysis on illustrations in *The Eastern Miscellany* during the First World War, we could find that the concrete, relational and complicated image of “Lie qiang” in it is quite different from stereotyped ones in other contemporary publications. This will certainly enrich and deepen nowadays researchers’ imagination on how people in the old days understood the world.*

はじめに

本稿は第一次世界大戦時期、すなわち 1914 年から 1918 年までの中国の雑誌『東方雑誌』の戦争報道に現れている列強の図像を分析し、その中で新たに生成された、列強のイメージ並びに当時の中国人の世界秩序に対する表象の性質をとらえようとするものである。

中国語において、「列強」という言葉は、1890 年代に日本に留学した学生たちによってもたらされたもので、中国近代史において重要な概念である。だが、その対象や内容は日中両国語で異なる。

日本語では、「列強」は英語の「Great Powers」とほぼ同じ意味、経済的、軍事的、外交的、文化的な力を持ち、しばしば他の小国の行動に影響を及ぼすことのできる一群の大国を指して

* 段書曉 復旦大学新聞学院コミュニケーション学専攻 博士後期課程

** 顧文 東海大学経営学部観光ビジネス学科教授

いる。

この用語は、19世紀初頭のナポレオン戦争後のウィーン体制による五か国同盟（イギリス、フランス、オーストリア帝国、プロイセン王国、ロシア帝国）から、現在のさまざまな国際問題研究機構に選ばれている世界七大国（アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、中華人民共和国、日本）まで、広い意味範囲を持つものである。

中国語における「列強」にはそのような広範な時間感覚がなく、ただアヘン戦争から第二次世界大戦後の米ソ冷戦に至るまでのおよそ100年の間で、中国に侵略を行った強国を指す。中国人にとって、中国と直接的な関係のない1814年のヨーロッパの強国はまだ「列強」とみなされていなかった。そしていま国連安全保障理事会で拒否権を持つ五大国の一角を占めるものとしての自国を「列強」と呼ぶことも全くない。中国語の「列強」は、単に国力の評価に基づく概念ではなく、特定の時代におけるある特定の心理状態のもとで見据えた「他者」を指していると言える。その心理状態とは即ち、強大な敵に対する憎悪、恐怖、憧れであり、弱小な自分に感じる無力、自己憐憫、嫌悪であり、また多くの強敵に囲まれ、活路を見出だせないという現実が与える圧迫感である。古代中国が「非中国文明」を軽蔑の目で見た、その態度が「蛮夷」という言葉で概念化されたのと同様に、近代中国が帝国主義秩序に巻き込まれた時、その状況下で生まれる閉塞的な心理状態のなかで出現した「他者」を「列強」という言葉で「他者」を表現している。

しかしこの重要な概念はこれまで学界において重視されることはなかった。近代中国の世界意識に関する多くの研究は「西方」、「東洋」、「外国」などの言葉をめぐって展開されているが、その時代のあらゆる涉外事務が「列強に囲まれている」という心理状態の下で行われ、「他

者」¹と「自己」に対するあらゆる理解＝想像も「列強」のイメージという強い磁場の影響下にあったという事実には気づかなかった。

本稿は「列強」という概念を中心に据えて、近代中国における「他者」のイメージの分析を行う。その理由は先行研究が史料の選択において「列強」と「外国」の間に区別を設けているからではなく、「列強」という言葉が史料の背後にある時代の精神状況をよく表していると考えているからである。

西村清和はその著書『イメージの修辞学』において、「イメージ」という概念の内実を三つに分類した上で、その中の二つを研究の中心に据えている。一つは、想像力による「心のイメージ」であり、二つ目は、絵画や写真や映画に見られる物理的ないし「視覚的イメージ」であ

¹ 「他者 (other)」とはポストコロニアリズム理論における概念の一つで、「自己 (self)」と対をなしている。主体の「自己意識」は「他者」を参照することでしか形成することができない。したがって「他者」は「自己」を区別すると同時に「自己」を可能にしているのである。西洋の言説においては、西洋の「他者」として人類学ないし、その日常生活における凝視と想像の対象としての「非西洋」は愚昧、未開と野蛮を意味していた。そのことについての分析はエドワード・サイードの『オリエンタリズム』において深く展開されている。「オリエンタリズム」が西洋の学術界において自己反省を引き起こした後に、イアン・ブルマが「オクシデンタリズム」の概念を提起した。すなわち東方もまた西洋を凝視し、想像しているのである。それが意味するところは、どのような文化も「外部」にいる「他者」の助けを借りて「内部」の「アイデンティティ」を構築しなければならないということである。中国において、「他者」は古代に「蛮夷」と称され、近代になって「西洋」、「東洋」、「外国」などの「非中国」の外部にいるものとなった。「列強」もまたまさにそれらの「他者」に対する呼称の中の特色ある一つである。中国およびその「他者」に関する研究は以下のものを参照。方維規『“夷”、“洋”、“西”、“外”及其相關概念：晚清訳詞从“夷人”到“外国人”的轉換』（『新詞新概念：西学訳介与晚清漢語詞匯之變遷』所収。郎宥榭等編著，趙興勝等訳 [M]。濟南：山東画報出版社，2012），謝貴強，『從固守天朝立場到融入世界文明秩序——从西方漢訳國名演變看中國人对西方列強的認知過程』。[J]。『學習探索』。2008(1)，王爾敏『鬼、鬼子、洋鬼子、假洋鬼子』（王爾敏，『中国近代思想史論続集』。[M]。北京：社会科学文献出版社，2005所収），許倬云著，『我者与他者：中国歴史上の内外分際』。[M]。北京：生活・読書・新知三聯書店，2010，王銘銘著，『西方作為他者：論中国“西方学”的譜系与意義』。[M]。北京：世界圖書出版公司，2007など。

る²。両者はさまざまな形で交差しているが、これまでの「他者（＝列強）」のイメージ研究はおもにこの二つの領域で展開してきたと言える。前者の「心のイメージ」は文学研究、とりわけ比較文学のポストコロニアリズム研究の重要な関心点であった³。本稿は主に後者の「視覚のイメージ」に焦点を当て、1914年から1918年までの中国における『東方雑誌』中の図像の分析に焦点を絞り、その「列強のイメージ」を通して、当時の中国人の世界秩序に対する想像の性質を明らかにしたい。ここでは、はじめに近代中国で生成された「他者（＝列強）」の「視覚的イメージ」について、これまでの研究状況について簡単に触れてみる。

一 近代中国における「他者（＝列強）」の「視覚的イメージ」の生成

近代中国における「他者（＝列強）」の「視覚的イメージ」についての先行研究は、いくつかのテーマに偏って集中している。

まず、清朝末期の『点石斎画報』（1884年創刊－1898年終刊）をはじめとする一連の画報における「他者」のイメージについての研究がある⁴。近代中国において最も有名な画報として、

『点石斎画報』には外国人や外国の物事に対する、今日から見ると奇想天外なイメージがたくさん描かれていて、ある種の「幻視された世界の形」だと言える（図1：『点石斎画報』における「スコットランド式死体利用法」、中野美代子、武田雅哉編訳『世紀末中国のかわら版：絵入新聞「点石斎画報」の世界』より）。

続いて、義和団事変などの一連の排外主義運動の荒唐無稽な宣伝画像についての研究がある（図2：「天津教案」の排外主義宣伝画、佐藤公彦『中国の反外国主義とナショナリズム：アヘン戦争から朝鮮戦争まで』より）。

さらに日中戦争の際の「日本」のイメージ、とりわけ「鬼子」（guizi）という蔑称から生み出されたさまざまな視覚イメージについての研究がある⁵（図3：「日本鬼子」のイメージ、武田雅哉『鬼子たちの肖像』より）。

このように、先行研究の対象は清末と日中戦争の時期に集中しているように見える。この二つの時期は、中国と外国が最も直接的に激しくぶつかり合っていた時期に当たるからであろう。こうした直接的な衝突においては、実際上の必要からか、もしくは感情のはけ口からかに関わらず、敵を戯画化する傾向が強く存在している。外国に門戸を開きはじめてばかりの頃に感じた異文明に対する無理解または歪曲、戦争状態にある敵に対する憎悪または恐怖、そしてその心理に基づいて生まれた「列強」の戯画は、近代中国における「列強」のイメージの非常に重要な側面であることは確かである。

しかし、中国が直接衝突と闘いに巻き込まれていない状況での、客観的で冷静な観察によつ

² 西村清和『イメージの修辞学』（三元社、東京、2009）、7頁。

³ 外国のイメージの研究は比較文学と歩調をあわせる形で進んできたと言える。それに対して「イメージ」を独立した問題として提起したフランスのJean-Marie Carreは、イメージの研究を、各民族間の、さまざまな想像の相互解釈の研究と位置づけている。詳しくはJean-Marie Carre、Marius-Francois Guyard、Jean-Marc Moura、Daniel-Henri Pageauxなどの著作を参照。中国の比較文学におけるイメージ研究は、孟華主編、『比較文学形象学』。[M]。北京：北京大学出版社、2001、孟華等著、『中国文学中的西方人形象』。[M]。合肥：安徽教育出版社、2006を参照。

⁴ 『点石斎画報』および同書における外国のイメージに関する研究は詳しくは以下の文献を参照。Xiaoqing Ye. *The Dianshizhai Pictorial: Shanghai Urban Life, 1884-1898*. [M]. Centre for Chinese Studies Publications, 2003、陳平原、夏曉虹編著、『図像晚清—「点石斎画報」』。[M]。上海：東方出版社、2014、中野美代子、武田雅哉編訳『世紀末中国のかわら版：絵入新聞「点石斎画報」の世界』（中公文庫、東京、1999）、武田雅哉『翔べ！大清帝国：近代中国

の幻想科学』（リプロポート、東京、1988）、Rudolf G. Wagner (edited). *Joining the Global Public: Word, Image, and City in early Chinese Newspapers, 1870-1910*. [M]. New York: State University of New York Press, 2007。

⁵ 武田雅哉『鬼子たちの肖像』（中公新書、東京、2005）佐藤公彦『中国の反外国主義とナショナリズム：アヘン戦争から朝鮮戦争まで』（集広舎、福岡、2015）

て形成された「列強」のイメージがあるとすれば、それはどういうものなのだろうか。もし「列強」のイメージが簡単な線で構成された漫画ではなく、写真のようなもっと多くの細部と複雑性を含んでいるものとしたら、それはどのようなものになるのか、これが、本稿が第一次世界大戦期に着目した最大の理由である。

遠く離れたヨーロッパ大陸が主戦場となっている第一次世界大戦を、中国との関係において論じた研究はそれほど多くないが⁶、この戦争が中国にもたらした影響については、共通認識が存在している。すなわち、この戦争によって、中国はかつて見習うべき模範としていた西洋文明に対する認識を改め、さらにパリ講和会議での挫折によって国際関係に対する信頼を失ってしまったということである。

当時のメディアの中では、『東方雑誌』が第一次世界大戦について最も多面的に、そして細かく掘り下げて世界情勢を分析した雑誌であると認識されている⁷。その客観的な態度と時勢を分析する能力を備えているゆえに、そこから浮かび上がる列強のイメージは戯画化され、歪

曲されたものとまったく異なるものになっている。

『東方雑誌』の事績は、別の次元で近代中国における「列強」のイメージの多様性を広げた。「中国」と「列強」との関係、「列強」間の協力と衝突、「列強」国家内部の矛盾と複雑性、異なる国籍を持つ個人が時代に巻き込まれた時に共有されている迷い、苦しみと無力さなどについて『東方雑誌』は注目し、それらのすべてを表象しようとしていた。列強と常に激しい軋轢関係に身をおいてきた近代中国のメディアでは、未曾有のものだと言える。

以上のような理由から、本稿では、第一次世界大戦期の『東方雑誌』を対象として選び、そこに置かれているテキストの文脈に即しながら、表象された図像をみていきたい。

二 『東方雑誌』の報道と図像

『東方雑誌』は、1904年3月11日に商務印書館によって創刊され、1948年に終刊した。中国近代史において刊行期間が最も長い総合雑誌であると言われている⁸。

45年間の刊行期間に、『東方雑誌』は幾度か大きな改版を行った。その中でも杜亜泉⁹が主導した第二次の改版が特に注目に値する。改版後、『東方雑誌』は国内外の情勢、社会問題、学術思潮などに対して迅速に反応するようになり、

⁶ 中国と第一次世界大戦の関係については詳しく以下の文献を参照。Xu Guoqi. *China and the Great War: China's Pursuit of a New National Internationalization*. [M]. New York: Cambridge University Press, 2005, Xu Guoqi. *Strangers on the Western Front: Chinese Workers in the Great War*. [M]. Cambridge: Harvard University Press, 2011. 陳三井.『華工與歐戰』.[M]. 臺北市：中央研究院近代史研究所，1986，汪暉.『文化与政治の変奏：一戦と中国の思想戦』[M]. 上海：上海人民出版社，2014，笠原十九司『第一次世界大戦期の中国民族運動：東アジア国際関係に位置づけて』（汲古書院、東京、2014）。

⁷ 『東方雑誌』に関する比較的総合的な研究は、詳しくは以下の文献を参照。陶海洋の博士論文『「東方雑誌」研究（1904-1948）』、洪九来.『寛容と理性：「東方雑誌」の公共輿論研究（1904-1932）』.[M]. 上海：上海人民出版社、2006.『東方雑誌』と第一次世界大戦との関係についての研究は以下のものがある。蔣紅艷の修士論文『「東方雑誌」と第一次世界大戦』、鄭大華、郭輝.『第一次世界大戦与中国知識界の思考—以東方雑誌為中心的考察』.[J].『浙江学刊』：2011（4）.『東方雑誌』の図像に関する研究は、盧淑桜.『図像、雑誌と反日情緒—以東方雑誌（1928-1937）為例』.[J].『南开学報（哲学社会科学版）』：2013（4）を参照。

⁸ 1926年にはすでに、著名な新聞人である戈公振がその古典的な著作『中国新聞学史』（[M]. 北京：生活・読書・新知三聯書店，1955）において、『東方雑誌』を「雑誌においてもっとも長く続き、もっとも努力しているもの」であると称賛していた。畢樹堂もまた1933年『独立評論』で、『東方雑誌』は書店雑誌類の中で「水準が最も高く、発行数が最も多い」と述べた。方漢奇は『東方雑誌』が「二十世紀前半における大量の文化情報と文化思想の材料を集め、保存した」ことを評価し、「自らが身を置いている時代の政治、経済、文化などの各方面の情勢についての『百科全書』である」とした。（方漢奇.『方漢奇文集』.[M]. 汕頭：汕頭大学出版社，2003:288）

⁹ 杜亜泉（1873-1933）、浙江省出身。1900年に中国人による初めての科学雑誌を創刊した。1904年に商務印書館に入社し、1909年4月から1919年年末まで『東方雑誌』の編集長を務めた。

時事評論や学術的文章も格段に増えた。「凡そ欧米各国の政治、経済、科学、文化などの方面に関する問題と、東西各種社会的な思潮の経緯と背景について、頻繁に文章を発表し評論を行なった」¹⁰。したがって、『東方雑誌』はその創刊の言葉において「選報（新聞記事集）」として自らを位置づけたが、第二次の改版においてその姿勢を変え、総合的な学術刊行物になったのである。そして早くも「これまでの雑誌の売上記録を塗り替え」¹¹、国内において発行数が最も多く、影響力も最も大きい定期刊行物となった。

第一次世界大戦は、ちょうどその第二次改版の直後に起こった。当時の『申報』（1872－1949年）、『字林西報』（1850－1951年）、『大公報』（1902－現在）などもこの戦争に注目していたが、『東方雑誌』は写真による図像を使って詳細かつ精確に第一次世界大戦の様子を報道していたと言える。第一次世界大戦時期の『東方雑誌』は主に編集長の杜亜泉の思想に基づいて編集されていたが、杜亜泉は「物事の間、および観念の間のつながりを探ること」という理念に従って、中国の事象を他の国との関係、つまり国際情勢において理解しなくてはならないという主張の持ち主であった¹²。第一次世界大戦は、列強間の関係と国際秩序を理解するための得難い機会だとして、『東方雑誌』はそれを一番の関心点にしたのである。

『東方雑誌』における戦争報道は以下のように構成されている（図4、図5、戦時目録、12巻10号）。

まず二、三編の戦争に関する社説がある。『東方雑誌』はもともと資料集としての性格を持つ刊行物であったが、杜亜泉が編集長になってから、雑誌は自分の立場を表明することに力を入れ始めた。そのため、社説が雑誌の見解を発表し、政治討論に参加するための主力コラムとなり、執筆は、通常杜亜泉や銭智修¹³などが中心となって行なっていた。戦争期間の社説のテーマは戦場の背後にある複雑な国際関係の分析、世界情勢と中国の前途についての討論に集中していた。また杜亜泉が唱えた有名な「東西文明論」¹⁴もまたその期間に生まれたものである。そして、連載コラム「大戦争続記」で戦争情勢の進展を、財政、外交、社会運動、思想文化、軍事技術などの多くの方面にわたって追跡した。「内外時報」というコラムは国内の刊行物による戦争評論を集め、それに対して「国外大事記」は毎日の戦況の変遷を細かく取りあげていた。さらにそれが「国内大事記」と連動する形で、国内の大きな出来事と世界情勢との連鎖的な関連を描き出そうとしていた。

次に、『東方雑誌』の図像について簡単に紹介する。雑誌は毎号8ページぐらいの口絵から始まる（図6、図7、図8、図9、図10、12巻

¹⁰ 蔣紅艷、『「東方雑誌」与第一次世界対戦』，[D]. 湖南師範大学修士学位論文、1頁

¹¹ 章錫琛、『漫談商務印書館』，全国政協文史資料研究委員会編、『文史資料選集』第43輯，[M]. 北京：中華書局，1964：78

¹² 原文は「事物或観念間、附以従前未有之関係」（事物の間、或いは観念の間に、今まで関連していない所にその関係性を与えよう）とある。（陳崧『五四前後東西文化問題論論文選』[M] 中国社会科学出版社、1985年P212.）

近年の学術界における杜亜泉の再評価は1993年華東師範大学出版社が出版した『杜亜泉文選』に始まる。関連する重要な文献として、王元化がこの本に書いた序文『杜亜泉与東西文化問題論』、および田建業、熊月之、許紀霖などが2013年12月3日『文匯報』に発表した『超越時代的「別一種啓蒙」』などがある。

¹³ 銭智修（1883－1948），浙江省出身。1911年に商務印書館に入社。1920年8月から1932年2月まで『東方雑誌』の編集長を務めた。

¹⁴ 「東西文明論」とは杜亜泉が調和論を中心に、中国と西洋の文化との結合の具体的な内実と道筋に沿って展開した一連の論述の総称である。彼によれば、東西文化の間に差異が存在しており、さらに西洋文明はその欠陥を表しつつある。第一次世界大戦はまさにその欠陥の直接的な体现であった。したがってこれからは調和論の方法をもって、東方文明の特性を「良薬」として西洋の病を治癒してあげなければならない。具体的な論述は杜亜泉の以下の文章を参照：『加査氏之東西兩洋論』（『東方雑誌』8巻2号）、『現代文明的弱点』（『東方雑誌』9巻11号）、『論思想戰』（『東方雑誌』12巻3号）、『静的文明動的文明』（『東方雑誌』13巻10号）、『戦後東西文明之調和』（『東方雑誌』14巻4号）。

11号)。

口絵は主に写真で、中国の図像と外国の図像は半分ずつである。中国の図像は常に国内外の重大な出来事に関連している。例えば中華民国建国記念日の祝典、第一次世界大戦に巻き込まれていた山東省の風景写真などである。外国の図像は主に軍と政府の要人の肖像写真、戦地写真、兵器の写真、また戦場と化した国の風景写真である。

雑誌の中の挿絵も写真が主である。肖像と風景写真が大きな割合を占めているが、戦地写真もあり、行軍、駐屯、閲兵という静態的な場面に集中している。交戦中の場面は、当時の撮影技術と従軍記者制度の制約のため、事後にセットされた再現写真や、迫真の版画で表現される状態にあった。

商務印書館の傘下には多くの刊行物と雑誌があった。記録によれば、商務印書館の責任者張元済は常に自ら『東方雑誌』の口絵を選んで¹⁵。それほど、毎号の口絵を重視していたと言える。雑誌の中の図像と文字は同じ文脈を共有しているとはいえ、それぞれ異なる意味の産出のメカニズムを持っている。『東方雑誌』の口絵の中には、雑誌の本文と直接的な関係を持っていないものもある。たとえば11巻1号の泰山の風景写真、12巻5号のカラーの花弁の写生など、それらに呼応する具体的な文章内容が存在しない。だが同時代のほかの(画報以外の)刊行物と比べて、『東方雑誌』の図像は使用量が非常に多い。第一次世界大戦を主とする海外の部分はその特徴が特に顕著である。

実は、『東方雑誌』には外国の刊行物から訳した記事が多いが、これらの文章に新しい図をつけることも度々ある。例えば、『東方雑誌』11巻6号の「戦術上より観たる欧州戦争の経過」という訳文と日本の雑誌『太陽』に掲載された

原文(図11、図12、20巻12号)を比較してみると、『東方雑誌』は『太陽』のオリジナルの記事より図の数が4枚増えている(図13、図14、図15、図16、図17、11巻6号)。オリジナルには「独対連合軍交戦地域詳図」という地図が一枚付されているのみであるのに対して、『東方雑誌』はその地図を使わずに、替わりに別の写真を五枚付したのである。それぞれ、ロシアとフランスの将軍の写真、ドイツの皇帝が戦場にいる写真、ドイツ軍の出陣時に家族との別れの場面、ロシア軍がドイツ国境近くで整列している写真を載せた。両陣営の指揮にあたっている軍関係者、戦場の様態、および前線と後方の関係を、分かりやすく描き出している。戦争というのは、顔を持つ個々の人間によって行われており、抽象化された地図上の実線と虚線だけでは、戦争の全体的なイメージを単純化されてしまう傾向があるが、『東方雑誌』は文章が中心であるとはいえ、写真による表象の真実を重要視していることが窺える。

三 『東方雑誌』における第一次世界大戦期の列強のイメージ

以上、1914年から1918年までの「東方雑誌」に掲載された図像を見てきた。以下、その中で生成された列強のイメージをまず三つの特徴に纏めてみる。

(1) 人間は理解を簡単にするために、自分と異なるものを分類することが常である。生物を種や属に分けたり、人を彼が所属している国家や文明に基づいて理解しようとしたりする。近代になると、「国民—国家」が国際関係の基本単位になった。従って、「類」としての国家のイメージは、人々が世界を知るための基本的な思考手段となった。『東方雑誌』もまた「類」としてのイギリス、アメリカ、日本などの列強のイメージを必要としていた。

一つの国家を空疎な国名あるいは戯画化さ

¹⁵ 洪九来、『漫談張元済与「東方雑誌」』[J]、『文景』雑誌：総第41期

れたイメージに還元してしまうというよく使われる手法とは異なり、『東方雑誌』はこれらの国のイメージを、具体的な事物によって表象していると言える。それらの事物の数と位置は組版の際に細心な注意が払われ、交戦している双方のそれぞれの状況が同等に重視されるようにしている。さらに関連のないように見える図像も併置し、国際問題の複雑さを表象しようとする意図が見える。

(2)『東方雑誌』は、どの国に対しても固定的で全体的なイメージで捉えようとするのではなく、多くの側面を持つ複雑な事物として理解し、表象している。例えば、制服の下に隠されてしまう個々の兵士のリアルな日常、戦争の被害者として見なされがちだった女性による戦争の支援、そして列強内部における社会各階級の間の矛盾など、写真を通して戦争の実態に迫ろうとする姿勢が窺える。

このように、すべての国家のさまざまな側面を関連づけ、相互に影響を及ぼし合う関係性のネットワークとして国際社会を理解しようとしていることが、『東方雑誌』の最も重要な特徴の一つだと考えられる。

(3) 列強と称されている国家の間の関係は単に「連合国」や「同盟国」のような表面的な関係ではなく、軍事的な決定から労働者によるストライキに至るまで、多くのレイヤーにおいて連動しているのである。

それに対して中国と列強との関係は、資本主義経済に脅かされつつある東方文明と、すでに完全に資本主義によってコントロールされている西洋文明との関係でもあったと言える。中国の敵は列強ではなく、問題だらけの資本主義こそ世界共通の敵であるかもしれない。表面上の対立の背後に実は連帯の可能性が隠されているのかもしれない。これもまた中国が最終的に参戦を宣言した後でも、『東方雑誌』が中立的な立場を依然として保ち続けた理由である

と考えられる。

以上述べてきた三つの特徴に基づいて、『東方雑誌』の新たな列強のイメージ間の関係をさらに三つのパターンに分類してみる。

1、「具象化」と「関係性」

(1) 肖像写真

権力者の肖像は一国の政治と経済、そして軍事の総体的イメージを人格化したものと言える。要人の肖像写真を挿絵として使うのは当時の習慣だったが、『東方雑誌』が掲載している肖像写真にはいくつかの特徴がある。

まず、それぞれの参戦国の要人肖像の数の割合がバランスよく配置されていることである(図 18、12 巻 2 号)。

中国が連合国に加入した後でも、『東方雑誌』にはいずれの陣営に対する偏りもまっただけでなかった。口絵とイラストの両方において、連合国と同盟国の要人の肖像はほぼ同じ割合を守っていた。さらに、かつて手本にしていた雑誌『太陽』(図 19、図 20、図 21、図 22、『太陽』所載風刺画)とは異なり、『東方雑誌』は決して政治家の風刺画を使わなかった。実際、当時の多くの刊行物が風刺画を使って自分の政治見解を主張し、写真を印刷できる(銅)亜鉛凸版法も使われはじめたばかりだったが、『東方雑誌』は写真を図像の主体にすることに決めていたのである。日本が中国に 21 カ条の要求を突きつけた時でも、その図像は威厳に満ちた日本の政界要人の肖像だった(図 23、12 巻 5 号)。当時の世論からすると異例だったと言える。写真自身もまたファインダー及びそれが身を置いている文章の文脈によって規定されているとはいえ、一枚の写真が伝えられる情報のほうがずっと複雑で、風刺画のように一義的なものではない。写真のリソースが乏しく、かつ写真印刷技術がまだ成熟していない時代に、写真の使用を堅持しているというのは、『東方雑誌』

が風刺画のような極端な図像の危険性を自覚していることを意味している。

もう一つは肖像と言葉の関係である。

『東方雑誌』(11巻5号)に「欧州政治要人小誌」という文章が載っている。ここでは、「セルビアの首相は……目が暗い灰色で、顔は長い髭をのばしている。一見して知勇兼備で穏健な人だとわかる」、「ドイツの陸軍総司令官毛奇(Molike)は……表情は凜として威厳に満ち、「不可犯」(犯すことのできない)のように見え、鉄血主義の産児だとひと目でわかる」という文の隣に、彼らの肖像写真が載せられている(図24、11巻5号)。ここでは、写真は文章の伝える内容の証拠となり、文章に描かれた国家の政治や軍事が写真の人格のイメージに還元されるように作用している。

次に前述の「欧州政治要人小誌」の中で紹介されている最後の人物を例に取りあげたい。ここで紹介されたのは参戦国の皇帝や将軍ではなく、亡くなったばかりのローマ教皇である(図25、11巻5号)。

ローマ教皇の願いは戦争の終結と世界平和だった。ただ、教皇は平和大使のイメージのみで登場したのではない。『東方雑誌』(12巻12号)が登載した『大戦中のローマ教皇の態度』という文章には、教皇の派遣したメッセンジャーがアメリカ大統領に平和を求めた出来事の複雑な背景を分析している。たとえば、教皇庁の人のほとんどがドイツ・オーストリア出身であること、カトリックとプロテスタントの対立、ローマにあるバチカン市国とイタリアとの複雑な関係、アメリカの中立的な態度の動揺などを述べている。そして、ここでも雑誌『太陽』の原文よりも多くの写真が付け加えられている。載せられた写真の1枚は教皇の派遣したメッセンジャーの姿は、アメリカ大統領の官邸前で撮られたものである(図26、12巻12号)。

このように『東方雑誌』にとって、文章のほ

かに、写真もまた、その事件の複雑さを表現するための重要な方法の一つであったことが理解できよう。

(2) 戦地写真

次に例示したいのは、『東方雑誌』に載せた軍服を着服している軍隊の写真である(図27、11巻4号)。近代的な戦争における軍服は、兵役を務める人間を制服に押し込め個性をはぎ取ってしまうため、複雑な特徴を無化し、感情を持つ一個人ではなく、一つの空虚なカテゴリーにしてしまうのである¹⁶。そのカテゴリーは国家の表象としても機能する。

『東方雑誌』は大量の戦場写真も使用している。統一された軍服の隊列が強いインパクトを持っているのである。しかしもっと注目すべきところは、それぞれの国の軍隊写真の選択と配置である。例をあげると、各国の軍備を紹介している文章において、同盟国と連合国以外に、植民地から徴兵した部隊の写真もたくさんある(図28、11巻4号)。そのような写真の集合、つまりインド系の兵士も黒人の兵士もイギリスとフランスの軍服を着ているという場面は、世界情勢の複雑性を浮き彫りにしていることが分かる。

以上のように『東方雑誌』の図像による表象の「具象化」がまた互いの「関係性」を示したと言える。

2、「個」が示す多様な側面

一国の国民を一つのイメージで理解するこれまでの図像と異なり、『東方雑誌』は参戦国の一般人の日常を伝えることで、彼らの人間としての側面に光を当てている。つまり、「列強」のイメージは、要人の顔や国旗に収斂されるものだけではなく、一人一人の人生と深刻なつながりを持った、多様な側面を持つものとして描

¹⁶ サム・キーン/佐藤卓巳、佐藤八寿子訳『敵の顔』(柏書房、東京、1994)、32頁

かれている。例えば、

(1) 人間の顔

兵士が暗い塹壕で家への手紙を書いたり（図 9 左、12 巻 11 号）、花を植えたりするという場面（図 10、12 巻 11 号）は、残酷な戦争における個人の生きがいの追求を表現している。12 巻 1 号の口絵には、フランス兵士がギャンブルをしている写真とドイツ兵士が飲酒をしている写真が並んでいる（図 29）。ここでは、戦闘自体の意義が無化されている。

このような事例はほかにもある。図 30 はオーストリア＝ハンガリー帝国の皇帝のヨーゼフが 80 歳の高齢で、肉親を立て続けに失い、肉親その棺桶の隣で立っている写真である（11 巻 4 号）。同じ主題で、フランスの女性が恋人の墓の前に跪いている写真があり、図像の左側には詩が付されている。「無定川のほとりにとり残されている白骨は、誰かの夢の中で微笑んでいる恋人なのではないか」（図 31、12 巻 1 号）と晩唐の詩人陳陶の詩を引用している¹⁷。この二つの場面は、どの国であれ、愛情を持つ人間という点においてはみんな同じだということを語りかけているのだと理解できよう。

(2) 女性の姿

戦争の被害者だと思われがちだった女性と戦争との関係にも、『東方雑誌』は注目している。「列強」のイメージと言えば、常に、男性的なものだと思われるのかもしれない。すべての政治的陰謀、軍事衝突、経済競争は一部の男性権力者の下で展開されるとイメージされがちである。しかしながら、軍装のドイツの女性兵士、兵器工場で働いているイギリスの女工、逮捕されているフェミニストなどの図像は『東方雑誌』によく現れる。銃後で戦争を支えた結果、女性の社会的地位はだんだんと高くなって

いった。女工からフェミニストにいたる一連のイメージの中には、近代社会の複雑性が含まれている（図 32、12 巻 12 号、図 33、13 巻 2 号、図 34、13 巻 4 号）。また社会主義や移民などの問題にも関心を持つなど、『東方雑誌』は「個」を示す多様な問題が交差する近代社会という文脈の中において、第一次世界大戦を理解しようとしていると言える。

3、「列」と「強」―― 関係性の中で捉えられるイメージ

「列強」の「強」は「強国」を意味している。一方、「列」は「強国」の集合を意味している。つまり、「列強」という言葉には、「群像」のニュアンスが含まれている訳である。言い換えれば、単一の国のイメージではなく、強国の間の「動的平衡」によって形成された国際秩序の中で、それぞれの国を把握していることが含意されている。

(1) 「強国」の表象

先進兵器に対するフェティシズムは、アヘン戦争以来、中国でもずっと存在してきた。『点石齋画報』、『真相画報』¹⁸だけではなく、『東方雑誌』にも、大砲、軍艦、飛行船などの大型兵器の写真が多く掲載されている（図 35、15 巻 12 号）。兵器の図像は、一国の軍事力の象徴として、「強国」という抽象概念を具象化していると言える。

もうひとつ言及しておきたい例は、『東方雑誌』に登載した「戦争と医者」という文章である。この文章では、人体に残されている砲弾の破片を取り出せる電磁技術を紹介し、治療中の科学写真が付されている（図 36、16 巻 1 号）。こうした科学写真は、戦争が、軍事だけでなく、

¹⁷ 原詩は「可憐無定河辺骨、猶是春閨夢裡人」（憐むべし無定河辺の骨、なおこれ 春閨 夢裡の人）（陳陶『隴西行』）とある。陳陶（812－885 年）、晩唐の詩人。

¹⁸ 『真相画報』は、1912 年 6 月 5 日に高剣父や高奇峰などによって創刊された。時事写真と時事評論をその主な内容としており、歴史画や滑稽画もある。1913 年 3 月に停刊になった。

人体と科学技術との関係を含む、多様な事象の集合として存在していることを表象している。

(2) 「国際秩序」の表象

国際秩序の中での各国のイメージは、『東方雑誌』において国際会議の写真、また何らかの政治的な意義を持った事件の起こった場所の風景を撮った写真によって表象されている。

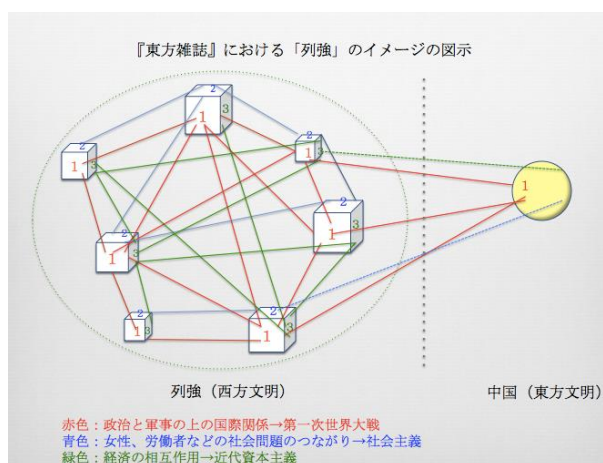
まず会議の写真に関しては、さまざまな条約を結んでいた時の、各国の代表の記念写真が、国際秩序を表象していると言える（図 37、16 巻 2 号）。そして、場所の写真、とりわけモニュメントとしての建物の写真は、ある理念および理想的な秩序を象徴するように機能している。

たとえば『東方雑誌』に記載した「欧州合衆国論」では、ヨーロッパ各国がともに戦争をやめ、新しい国際秩序を作ろうと呼びかけ、そこでかつてハーグ万国平和会議が行われていた場所の建物階段の写真を使っている（図 38、12 巻 11 号）。会議と建物入り口の階段は、新しい国際秩序への志向が看取できる。

おわりに

近代中国における列強の視覚的イメージについての先行研究は、おおむね清朝末期と日中戦争の時期に集中している。この二つの時期は、中国と外国が最も直接的に激しくぶつかり合っていた頃であるがゆえに、そこでは敵を戯画化する傾向が強い。しかしながら、中国が直接衝突と闘いに巻き込まれていない時期に、一步引いたところから、冷静な観察によって生成された「他者」のイメージは、あまり注目されてこなかった。本稿では第一次世界大戦時期の『東方雑誌』を研究対象に選定し、その中で新たに生成された、列強のイメージならびに当時の中国人の世界秩序に対する想像の性質を、三つの特徴とその相互関係のパターンで析出することを試みた。その三つのパターンが相互に

作用するネットワーク状をなす列強のイメージを図示すると以下ようになる。



このように、『東方雑誌』は近代化という大きな文脈の全体において列強を観察し、中国と列強との関係を理解しようとしている。当時の世界において最大の事件であった第一次世界大戦は、近代性が含んでいたさまざまな複雑な問題の中でもっとも突出した、そしてもっとも極端な一側面にすぎない。硝煙の上がっていない、もっとも広大な後方では、資本主義経済がグローバル化の荒波を巻き起こし、社会的地位が上がりつつある女性が自らの権利を勝ち取ろうとし、抑圧されていた労働者階級が立ち上がろうとしていた時代でもある。『東方雑誌』の編集長である杜亜泉が唱えた「東西文明論」もまた、第一次世界大戦を通して西洋文明を反省し、いまだ資本主義世界に巻き込まれていない中華文明から抵抗と突破の可能性を見出そうとしたものである。『東方雑誌』の立場からから見れば、それこそ直接参戦していない中国とヨーロッパの戦争との真実の関係であったと看取れる。

しかしながら、冷静で客観的な声は常に集合的な激情に圧倒されてしまい、複雑で多面的曖昧な写真も奇想天外な戯画ほど人々の目を引き付けることができない。そのため、国を救お

うとする当時の愛国分子にとっても、古人の目から変形されていた世界から真実を見出そうと必死になっている現代の研究者にとっても、『東方雑誌』における列強のイメージは、あまりにも列強諸国の日常（図 10 に表れる花壇を作るなどのような人類共通の生活環境と人々の喜怒哀楽）の表現を重視しすぎており、戯画が与えるような、強烈なインパクトを持っていないがために無視されてしまう。我々は進化の頂点に居座り、手元にある材料で、人類がだんだんと奇想と偏見から離れて他者と自己を理解するという発展の物語を構築するほうをより好む。先人のほうが我々よりはっきりと世界を見極めていたと認めるのは難しいかもしれない。だが、『東方雑誌』の例が示すように、それは先人たちがきちんと世界の複雑性と多様性を認識していたという事実が無視されたのも、現代人の奇想にすぎないのではないかと考えざるを得ない。

残された課題として、戯画化された列強のイメージや『東方雑誌』に見られるような列強のイメージなどの様々なイメージ間の関係、つまり近代中国における「列強」のイメージの異なる側面の間の関係、および歴史における変遷の過程については、次稿に委ねたい。

参考文献

- ①《東方雑誌》（第 11 卷—第 16 卷，1914. 7—1919. 3）. [M]. 上海：上海書店出版社，2012。（早稲田大学中央図書館、及び復旦大学新聞学院資料室所蔵）
- ②雑誌『太陽』（博文館、東京 1895-1928）、V20-V40（1914-1918）（早稲田大学中央図書館所蔵）

謝辞：

本稿は、2015 年 7 月早稲田大学総合人文科学研究センターが主催した第 1 回国際フォーラム「越境する人文知」にてその一部分を発表した。その際に千野拓政（早稲田大学文学学術院）先生のご指導を賜った。また本稿作成に当たっては、岩佐昌璋先生（九州大学名誉教授、日本郭沫若研究会会長）をはじめ、河原鎌一郎先生（元東海大学教授）、

柳田快明先生（元熊本市必由館高等学校教諭）のご教示を賜った。先生方のご厚意に深甚の感謝を申し上げる。

図版：

図 1

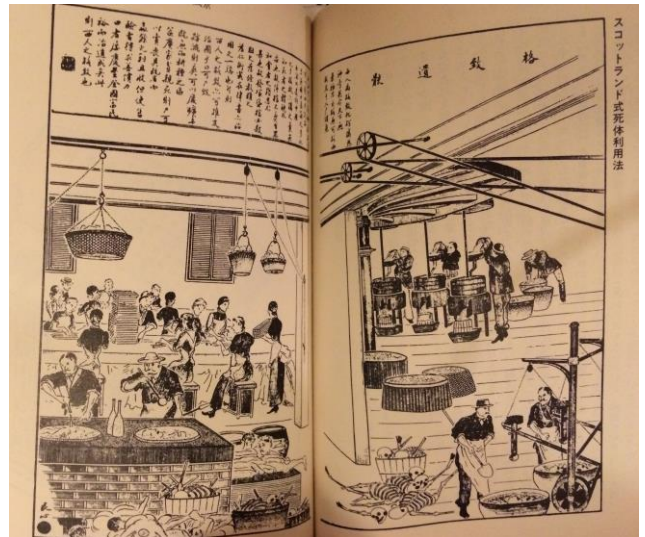


図 2



図 7

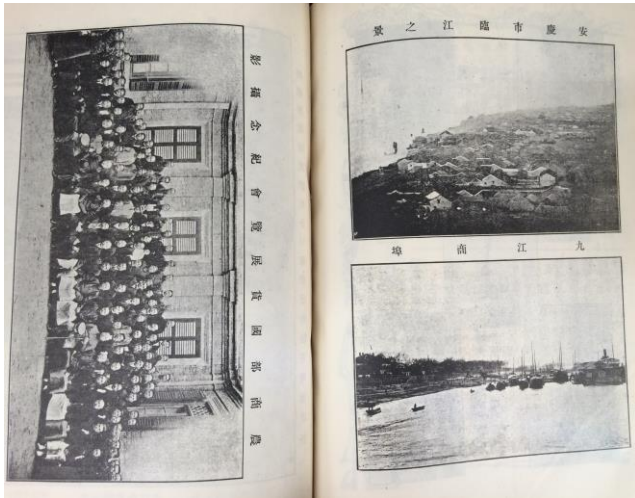


図 8

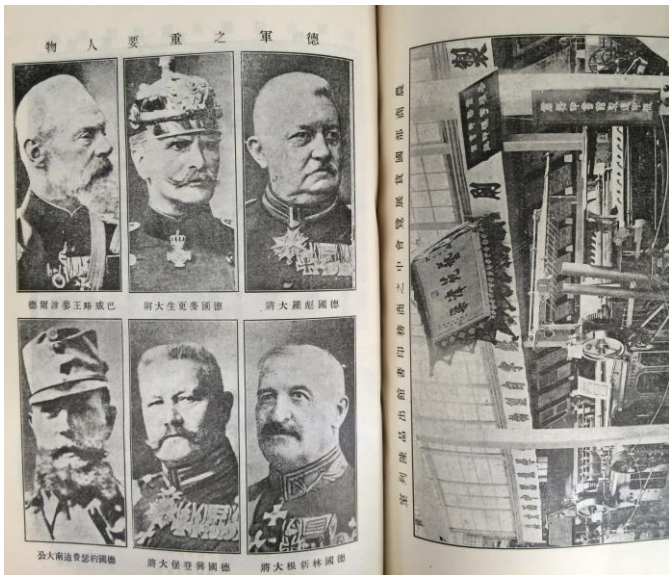


図 9

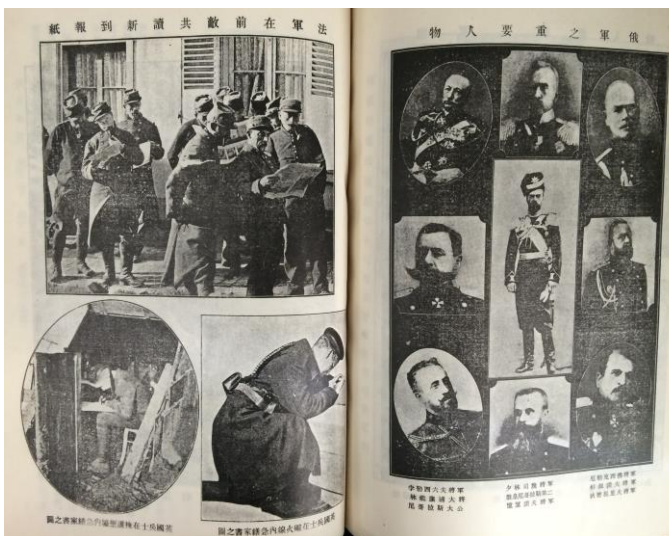


図 10

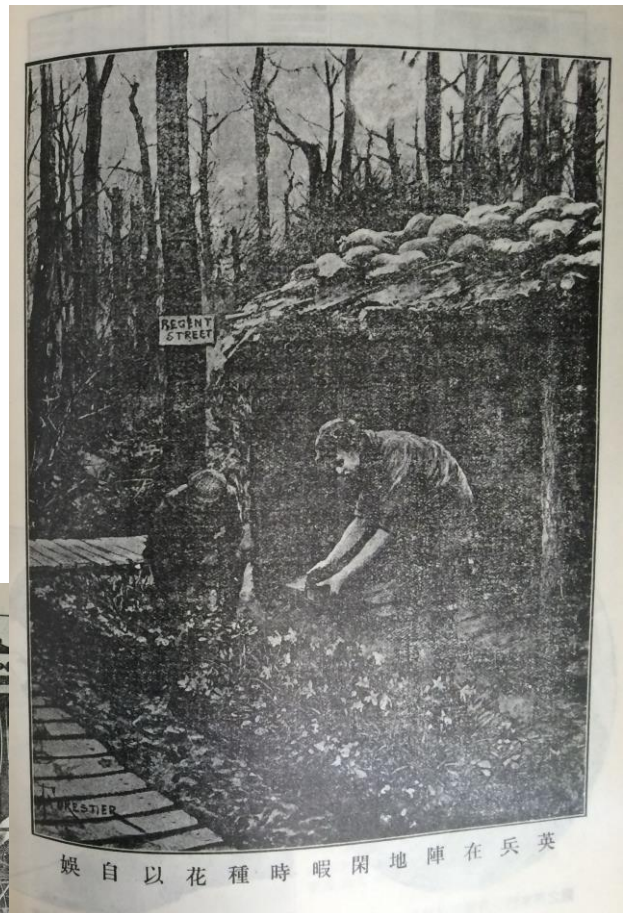


図 11

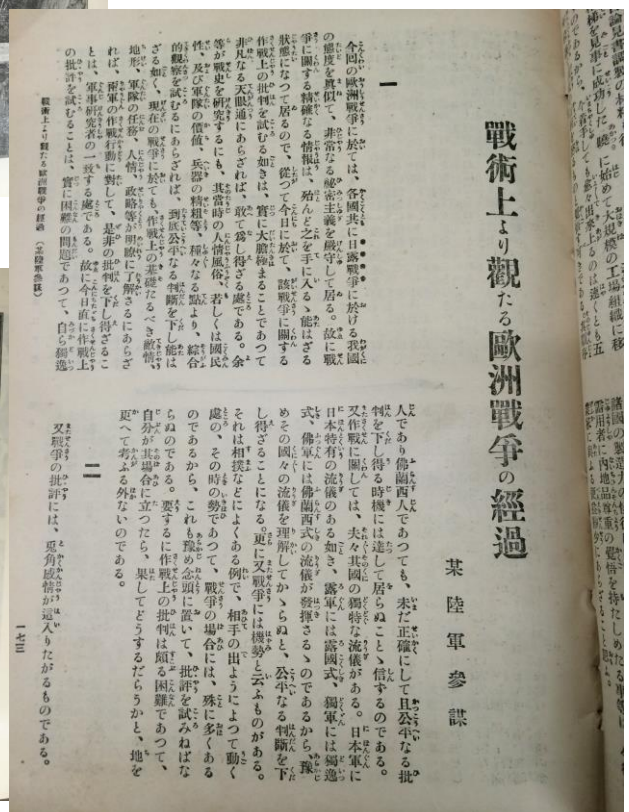


図 12

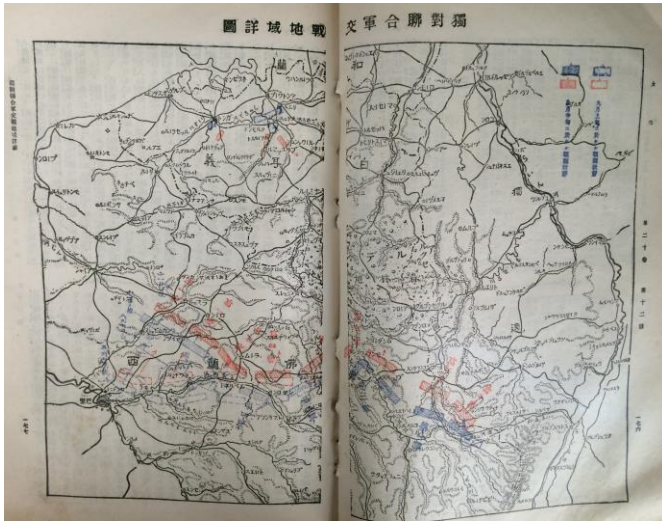


図 13



図 14



図 15



图 16



图 17



図 18

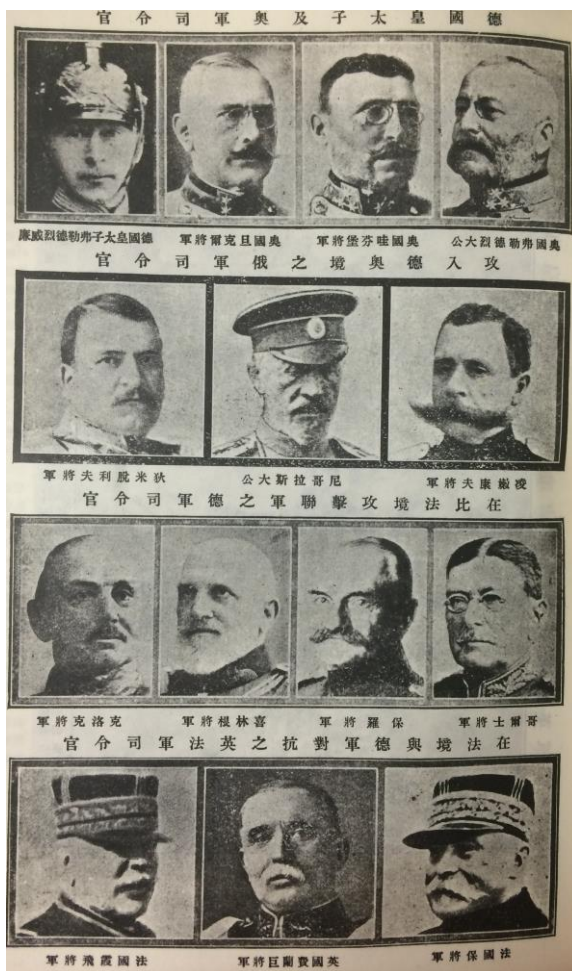


图 19



図 20



図 22

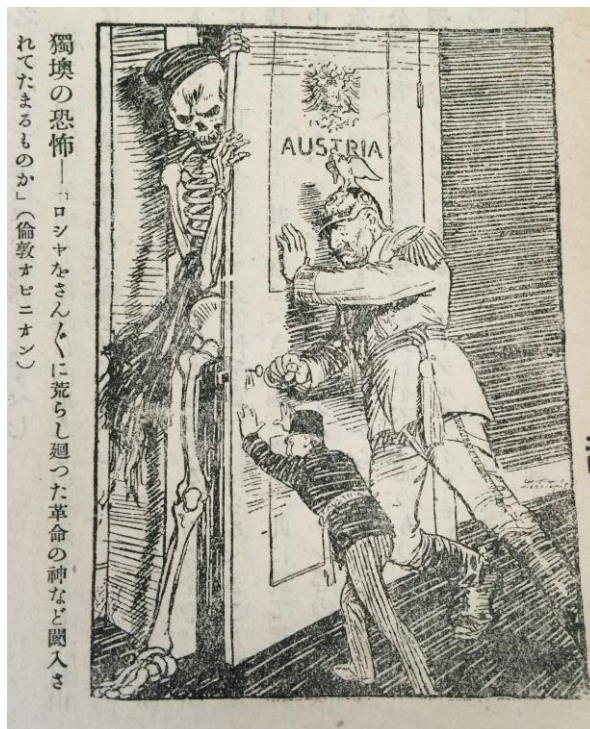


図 21



図 23



圖 24

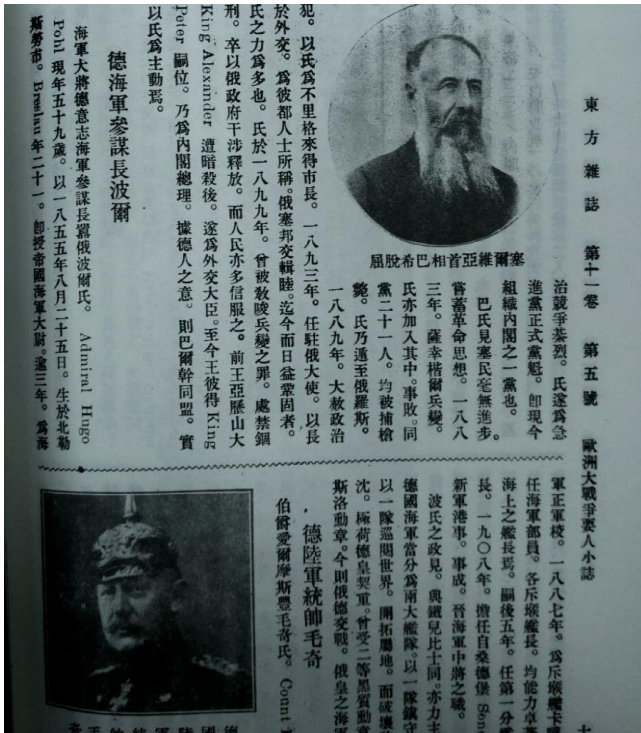


圖 25

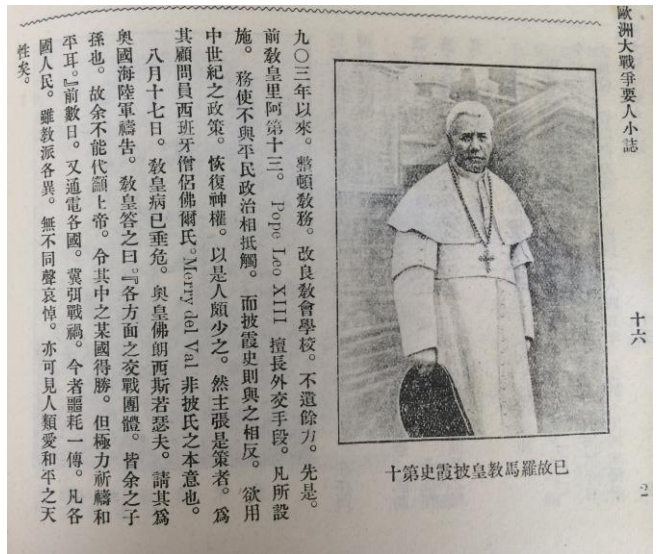


圖 26



図 27



図 28



図 29



図 30



図 31



图 32



图 33



图 34



图 35



